

# 目録からの出発



伊能忠敬の肖像画

▼▼⑨

佐原（千葉県）の商家の家督を譲って隠居し、五十歳で江戸に出て天文暦学を学ぶ。五十五歳から幕府の測量隊を陣頭指揮して全国踏破。正確な日本地図を作り上げてしま

う。「中高年の星」として、このころブームになっている伊能忠敬。そのとりこになった二人の主婦が、彼が残した手紙などを整理しながら、「忠敬のなぞ」を解き明かそうとしてくる。

☆☆☆☆

「なぜ、天文暦学を学ぼうとしたのか？」「体の弱い忠敬がなぜ、延べ三万五千キロにも及ぶ測量の旅を歩き通せた

## 日本地図を作製

（いのち・ただたか）1745年上総国（現在の千葉県）小関村に生まれる。17歳で佐原村の伊能家の婿養子に。49歳で隠居が認められ、翌年江戸に出て天文暦学を学ぶ。55歳から測量の旅に出て全国踏破。73歳で死去。

のか？」「……」

伊能陽子（65）。東京・世田谷区に住む忠敬から数えて七代目、洋画家の洋の妻。八四年に重要な忠敬の資料を佐原市に引き渡した際に、手元に手紙やメモなどの私文書が大量に残った。五十歳だった彼女は、区が主催する古文書講座に通いながら、手紙類に目を通し始めた。

安藤由紀子（65）。千葉県八千代市在住。洋の小学校時代のクラスメート。国会図書館憲政資料室に勤め古文書に詳しい。四十六歳の時、母親の介護のために退職。八八年、親しくしていた陽子が忠敬の資料整理をしているのを知り、一緒に資料の目録作りに参加することになった。

伊能家の茶の間で、作業を進める二人の心をまずとらえたのは、忠敬がなぜ、天文暦学を学ぼうとしたのか、という疑問だ。

推理は、いまのところ、三段階説に落ち着いている。

第一段階。名主時代に、利根川の洪水で田畑の境界を復元する際、測量の勉強をし、

その面白さを知る。

第二段階。米問屋をしていた関係で、仕入れ先である当時の米所、奥州や近隣の国々の商圏を地図でとらえたいくなる。

第三段階。四十五歳の時、江戸詰めの仙台藩医、桑原隆朝の娘、ノブを三番目の妻に迎える。

仙台藩にとって蝦夷（えぞ）地（現在の北海道）の防衛上、この地域の地図作りが必要になっている。仙台藩出身の幕府の若年寄、堀田正敦が正確な暦作り、蝦夷の地図作りのために、西洋暦学に精通していた高橋至時（よしとき）を大阪から呼んで、幕府の天文方に据えようとしている。そんなホットな情報を桑原から得て、江戸で天文暦学を学ぶことを決断する。

☆☆☆☆

ノブとの結婚。これが忠敬の再出発を決めるきっかけになるのだが、注目すべきは、実は佐原時代に、天文暦学のカリキュラムの基礎編ともいえる「授時曆」を済まし、江戸に出て高橋至時の弟子になったときには、次のカリキュラムから始めた事実なのである。

考えようによっては、ノブとの結婚は、目的実現のために、用意周到に仕組んだものかもしれない。

そんな推理を進めていくと、忠敬は江戸でたまたま天文暦学に出会い、それがきっかけで地図作りをするようになったのではないことは明白だ。四十代から、佐原で綿密な人生計画を練っていたようなのである。

敬称略  
（編集委員 足立則夫）

## 40代から綿密に人生計画